

## 第二十回 竹山というところ (三)

そんな竹山も、一九七〇年から始まった大規模団地の造成に伴って移転を余儀なくなってしまう方々もいて、地域の繋がりは時とともに変わってきている。それでも今も竹山町内会として強い繋がりが残っている。現在、十六戸で町内会が構成されているが、私たちもお仲間に入れていただいている。毎年、決まった集まり事があり、コロナ禍までは年八回あった。町内の清掃などの後には小宴が催され、そこで聞く町内の昔の話や日々の出来事の話は興味がつきない。最初に私が聞いたのは、M会長のスズメバチのトラップの作り方だった。春先、少し暖かくなる連休の頃に、スズメバチの女王蜂が目覚め、巣をつくりはじめ徐々にハチの数が多くなり、それらのハチも総出で巣をどんどん大きくしていくのだそうだ。大きくなってしまった巣は素人が手を出せないくらい危険なものになる。ただでさえスズメバチに刺されると危険なのだが、巣を壊されると総出で立ち向かってくるのでへたに手を出せないのだ。そこで女王蜂が巣をつくり始める前に駆除することが重要になる。そのため捕獲器のつくり方を絵入りで解説してくれる。M会長は頼まれれば大きくなった巣の駆除もするのだが、できればみんなで巣をつくるまえに対策を取りましょうというお願いなのだ。あと、大家族のMさんの木白で二升の餅つきをする話や、建具職人のKさんの弟子入りした親方がノミを研いだら立てて倒れなかったという話など、ホホウという話ばかりだ。

年中行事のなかに竹山神社祭というのがある。竹山で標高が一番高いあたりに竹山神社はある。市史によると最初は小祠で春日大社と書かれた木札と鏡一対が祀られていたが、明治三十八年(一九〇五年)に、縁あつて毘沙門天を合祀して、眺望の良い現在地に創立されたとある。一九九八年には建て替えら鳥居のある現在の姿となっている。今は、神社のまわりはすっかり木々に覆われているが、木々が無かった頃は、山並みが一望できたようだ。竹山神社祭といっても特に神事があるわけではないが、年二回、神社のまわりの落ち葉を掃除し、お供えをして町内皆でお参りするのだ。そのほかに年が開ける深夜に皆で初詣するのを欠かしたことがないと聞く。町内会では建具職人のKさんが神社担当として行事の仕切りをされている。毎年、神社会計の報告もされるのだが、お賽銭も結構な額になることから、この地域だけでなく広くお参りに来られる方がいるということだ。

ここは、最初にふれたとおり市街化調整区域に指定されている。市街化調整区域は、市街化を抑制する区域とされ、住宅の建築も厳しく規制されている。市街化調整区域というと雑木林や農地がひろがり、ところどころに資材置き場などがあるイメージだが、なかには竹山のようななれつきとした集落もある。そこには豊かな自然があり、時にはその樹木などを生活の糧にし、またその自然と闘ってきた時間の積み重ねがある。明治の中期に先人が入植して以来、数々の苦労を重ねてきた人々が互いのつながりを大切にし、地域の守り神とし神社を祀り大事にしながら暮らしているのだ。

